アフリカの非正規市街地をフィールドとした持続型都市社会モデルの構築

Creating a Model for Sustainable Urban Society Based on the Field Study of Informal Settlements in Africa

研究代表者 木多道宏（工学研究科 教授）

研究協力者
［学内］澤村信英（人間科学研究科 教授） 杉田映理（人間科学研究科 教授） 杉田美和（工学研究科特任 准教授） 小島見和（工学研究科 助教）
安福健祐（サイバーメディアセンター 准教授）
［学外］中島直人（東京大学大学院工学系研究科 准教授） 岡崎瑠美（芝浦工業大学建築学部 准教授） 志摩憲寿（東洋大学国際地域学部 准教授）
土田寛（東京電機大学未来科学部 教授） 清水信宏（北海学園大学工学部建築学科 准教授） 下田元毅（大手前大学建築＆芸術学部 講師）
Seth Asare Okyere（アリゾナ大学上級 講師） Daniel Oviedo（ロンドン大学 准教授） Stephen Kofi Diko（メンフィス大学 講師）

1.「地域文脈（地域コンテクスト）」の視点

非正規市街地（informal settlement）とは、法律的な許可を得ずに建設される建物群を指します。内戦や飢餓を避けて他地域から流入してきた人々によって、河川沿いや山麓など未整備の土地に形成される場合が多く、インフラがないままに建物が密集するため災害に対して脆弱であり、治安や衛生状態が極度に悪化するとスラムと言われる状態になります。アフリカでは都市人口の約55％もの人々が非正規市街地・スラム（以下、非正規市街地と略記）に住んでおり、非正規市街地の改善は喫緊の課題ですが、いまだに有効な改善手法が見出されていません。

当プロジェクトチームは、この状況を打開するため、「地域文脈（地域コンテクスト）」の視点から調査と実践に取り組んできました。「地域分脈」は事象の前後関係としての「連鎖的文脈」と、背景としての「組織的文脈」が統合された概念であり、前近代・近代・現代と時代を越えて継続されてきた都市計画やまちづくりの中に「普遍のテーマ」が潜在し、人々（もしくはプランナー）がその解決の仕方を「発展的に」持続させていく連鎖の質や価値が「連鎖的文脈」です。そして、生き生きとした都市・地域の空間組織や景観の成立は、社会組織、生活様式の在り方、人々のイメージの在り方により背後から支えられている。この目に見えない空間形成原理を「組織的分脈」と定義しています。

2.「地域文脈」を継承する自律的な非正規市街地改善モデル構築プログラム

非正規市街地のように深刻な社会課題が複合する地域であっても、必ず土地や建物に対する「肯定的」な人々の努力や思いがあるはずです。それを過去と現在に見出し、未来に発展的に継承するためのプログラムを構想しました（表1）。

プログラムはコミュニティレベルと都市レベルの二つからなります。コミュニティレベル（表1左）では、「学校を核としたまちづくり（SbD: School-based Development）」を通して、コミュニティが自律する仕組みを形成するため、フェーズ1：コミュニティにおける「地域分脈」の解読、2：コミュニティが解決するべき社会課題の設定、3：SbD授業の計画、4：SbD授業の実践、5：SbD授業の継続とコミュニティプランの立案の5段階からなるプログラムを計画しています。小学校は路地・街路ネットワークの重要な結節点にあり、子どものみならず若者・大人・高齢者まで多様な人々が出会う場所であること、卒業生や親世代も小学校に愛着があり、外部空間の維持管理や行事など地域活動の拠点となりやすいこと、普段は交流のない地区どうしであっても学校で子どもを介したつながりが生まれることなどから、小学校を核として、地域の社会課題に取り組むまちづくり授業を導入し、児童のみならずPTAや地域組織など支援者を巻き込むための活動をSbDと呼んでいます。現在、有効な連携がされていない様々な組織群、例えば土着コミュニティ、CBO（自生的組織）、NGO、自治体などのプラットフォームを形成し、地域の将来像であるコミュニティプランを計画することも目標とします。

一方、コミュニティレベルの改善プログラムを都市計画により支援することも重要です。アフリカ諸地域には、植民地時代のみならず独立後においても欧州型の都市計画制度が導入されてきましたが、相互扶助や信頼関係に基づく土地の共同管理など、元来諸地域に受け継がれてきた「共同性」を弱体化させることになりました。そこで都市レベルにも改善プログラムを検討し（表1右）、フェーズ1から5にかけて、植民地化前から現代に至るまでの都市形成・都市計画の変遷を整理し、アフリカ諸地域固有の都市計画・都市運営にか

	コミュニティレベル	都市レベル
フェーズ1	**コミュニティにおける地域分脈の解読** 空間構造と社会組織・維持管理の仕組み・行事の運営・イメージを調査し、社会・空間の構成原理（組織的分脈）を把握する。過去から現代に至るまちづくりの創意工夫を聞き取り、時代を越えたテーマや考え方（連鎖的分脈）を明らかにする。	**都市形成の把握** 前近代・植民地時代・独立後・現代に至る市街地の形成プロセスを把握し、非正規市街地形成の要因を考察する。
フェーズ2	**コミュニティが解決するべき社会課題の設定** コミュニティに生じている社会課題を調査し、コミュニティが自ら改善に取り組むべき優先課題の設定を行う。さらに、当該課題の実態について悉皆調査を行い、SbD授業の内容検討やコミュニティプランの計画に必要な情報を収集する。	**現代の都市計画における課題設定** 現代の都市計画制度やマネジメントについて評価し、非正規市街地の改善に向けて克服するべき都市計画上の課題の洗い出しを行う。
フェーズ3	**学校を核としたまちづくり（SbD）授業の計画** コミュニティの小学校群からSbDの拠点とする小学校を（事前に）選定し、学校の教員とともに、地域文脈を理解し、まちづくりの成功体験を得るためのSbD授業を計画する。また、地域と関係のある社会組織（土着コミュニティ、自生的組織、NGO、自治体等）とSbD授業を運営するプラットフォームを編成する。	**継承するべき都市計画の理念の解読** 植民地化前の都市形成・都市計画を詳細に把握し、生態系や地域性に配慮した都市計画のテーマや考え方（連鎖的分脈）を明らかにする。抽出7カ国と比較し、当該都市の特徴を位置付ける。
フェーズ4	**SbD授業の実践** 拠点学校においてSbD授業を実施し、祖父母・親世代へのインタビュー、大切な場所や課題の地図化、未来ビジョン作成、小規模な改善活動を行い、次年度に向けた改善点を検討する。児童によって収集された地域情報をデータベース化し、地域文脈を継承するための役割を学校に持たせる。	**継承するべき都市計画の理念の解読** 独立後の都市形成・都市計画を詳細に把握し、理想の社会形成を目指した都市計画のテーマや考え方（連鎖的分脈）を明らかにする。抽出7カ国と比較し、当該都市の特徴を位置付ける。
フェーズ5	**SbD授業の継続とコミュニティプランの立案** SbDプログラムを継続する。児童が作成した未来ビジョンを分析し、フェーズ1・2の分析結果を加えながら、プラットフォームを構成する様々な社会組織の活動を包摂するコミュニティプランを立案する。プロジェクト会議により、実効性のある内容となるよう洗練させる。	**都市計画制度の立案** コミュニティプランとの連動により、学校を核とした非正規市街地改善モデルの形成を誘導しつつ、スプロールなど都市の根本的な課題への対策を包括する都市計画を提案する。

表1：非正規市街地改善モデル構築プログラム

写真1：小学校におけるwifiの整備

写真2：小学校の児童・先生とAAETのメンバー（小学校の中庭にて）

かわる大切な考え方の解読を行い、欧米主導の近代化による課題をも克服するための都市計画制度の提案に至るプログラムとしました。

3. 今年の取り組み

ガーナ・アクラではLa地域・Abese地区を対象にフェーズ1と2を終了し、シェラレオネ・フリータウンではMoyiba地区におけるフェーズ1の取り組みをほぼ終えています。これらの成果がUN-Habitat（国際連合人間居住計画）に評価され、モザンビーク・マプトでも改善プログラムの実践を依頼されることになりました。今年度より、日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（A）「地域文脈を継承する非正規市街地改善モデルの構築と危機的課題の複合する地域への適用」（代表：木多道宏）や、VOLVO RESEARCH AND EDUCATIONAL FOUNDATIONS「TRANSFORMING THE UNWALKABLE CITY: KNOWLEDGE, PRACTICES, AND INTERVENTIONS FOR A MORE INCLUSIVE FUTURE OF WALKING IN AFRICA」（代表：ロンドン大学 Daniel Oviedo）などの支援を受けることになり、プロジェクトの推進力が高まっています。今年度は、アクラ（フェーズ3）、フリータウン（フェーズ2）、マプト（フェーズ1）での取り組みを同時に進めており、成果を取りまとめているところです。

アクラでは、Abese地区のLa Anteson Roman Catholic小学校の先生方とSbD授業の検討を始めています。Abese地区を含むLa地域全体の「博物館づくり」を将来の目標としつつ、今年度は、土着信仰により地面に形成された「シュライン」（土地の霊性の表示物）をテーマとして、フィールドワーク、マップづくり、新しいシュラインの場所と形の提案、製作実践からなる授業を計画しています。この学校では、wifi、PCなどのIT機器は全く整備されていなかったため、SbDの準備として、9月には校舎へのwifi整備、PCとプロジェクターの導入、先生によるパワーポイントを用いた授業の実践などを行いました（写真1）。Abese地区の伝統コミュニティにも、SbD授業を推進するためのチーム「AAET: Abese Adonten Education Trust」を結成していただき、地域からもプロジェクトの展開が期待されています（写真2）。